

## 第 19 回オーライ！ニッポン大賞 受賞者の概要（12 団体・者）

No.	所在地	受賞者名	概要
<b>オーライ！ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞) 1件</b>			
1	長野県 泰阜村	特定非営利活動法人 グリーンウッド自然体験教育センター	<p>3～12泊程度の「信州こども山賊キャンプ」は、ひと夏で1100人の小中学生と400人もの青年ボランティアが集う「行列のできるキャンプ」となった。この時期、村の平均年齢を下げ、そして食材（野菜等）のほとんどを村の農家が提供する等、村に様々な波及効果をもたらしている。この村に魅力を感じた子ども約20人が、1年間の山村留学：暮らしの学校「だいらぼっち」にチャレンジして村の小中学校に通う。子どもの週末や放課後の体験活動を支える仕組みをはじめ、大学生や若者夫婦が自然や民家で学ぶ仕組み等、住民・NPO・行政・大学等が協働する年間を通した自主的な「学びの活動」が次々と組織化され始めている。このような自律への取り組みに刺激され、若者のU・Iターンが増え青年団まで復活。山村留学の卒業生がIターンで村に定住する現象も始まり、限界集落が消滅に寄与したばかりか、村に一つの保育園に待機児童まで出るようになった。人口1600人の村に2万人の「学びをとおした関係人口」が創出され、まさに「コソ者」が行く「教育」が地域再生の「真ん中」に位置付き、疲弊きまった山村に希望の灯がともった。<b>当団体はこれまでに審査委員会長賞、大賞を受賞し、創始者がライフスタイル賞を受賞しているが、これまでの事業継続による成果と同時に、新たな事業展開による成果も挙げている。山村留学を体験した子どもたちが大人になって地域に移住してくるなど、幼少期の体験をきっかけとした田園回帰の流れを具現化、非常に先進的かつ地に足のついた取り組みであり、人口減少下でも幼少人口を一定数確保しつつけていることは高く評価されました。</b></p>
<b>オーライ！ニッポン大賞 3件</b>			
2	北海道 下川町	下川町産業活性化支援機構（タウンプロモーション推進部）	<p>下川町が抱える高齢化・担い手不足・雇用の縮小などの地域課題を解決するため、人口減少を食い止め、移住者の誘致を行うために2016年に創設。町のPRやイベント・移住体験ツアーの開催のみならず、家探しのお手伝い、仕事の無料紹介・起業家の育成などを含めた移住に関わるほぼすべての事柄を広く丁寧に引き受けるため、ワンストップで対応できる窓口としての機能を備えている。また、移住後のフォローとして、寛容な町民性を活かした町民交流会「タノシモカフェ」（参加者は地元民・移住者他）も月1回のペースで6年継続開催している。当団体を通して移住した方は7年で約150名で、これは下川町の人口の5%にあたり、移住者や関係人口の拡大に大きく寄与している。<b>移住者誘致は全国各地で行われている中、「一年後移住するぞ！プロジェクト」として1～2年後の移住を想定した準備をするというコンセプトが、コロナ禍で現地の往来がなかなか叶わない中で工夫があり、移住予定者から見て安心感がある。また、準備期間中の下川町のフォローはもとより、移住予定者の「移住同期」として横のつながりで連携を取り合うという取り組みも、移住誘致をより実効あるものにしており、他地域での応用可能な取り組みと高く評価されました。</b></p>
3	岩手県 遠野市	特定非営利活動法人 遠野山・里・暮らしネットワーク	<p>2019年度の遠野グリーン・ツーリズムは年間9,000泊を超え、2005年度と比較し3.2倍に成長している。2004年からはじまった地元企業である遠野ドライビングスクールと連携した遠野体感型グリーン・ツーリズム自動車合宿は、2021年度は約8,000人、合宿生580名が市内の宿泊所に14泊程となり、そのコーディネーターを担っている。他地域には珍しい民間団体によるツーリズムによる地域づくりの中間支援を行っていることが特徴である。2019年度には、遠野の暮らしを旅のコンテンツとして販売するワンストップ窓口・販売所「遠野旅の産地直売所」を遠野駅前開設。地域の「ありのままの日常が体感できる旅」の総合コンシェルジュ機能を整備した。また、コロナ禍でもマイクロツーリズムやアクティビティの拡充、関係機関と協力した新企画を販売する等グリーン・ツーリズムを軸にした様々な取り組みを展開し、発展的に継続している。<b>コロナ禍で従来のグリーンツーリズムが大きな打撃を受ける中で「コロナ禍だけどころか」「コロナ禍だからできる」という逆転の発想でチャレンジした。特に「超マイクロツーリズム」は、関係人口づくりで自ずと域外へ目が向く中、市内の地元住民を対象としたツーリズムを実践し多数の市民が参加したことは、コロナ後のツーリズムを直接間接支える地域の土台を築くことにつながるのと高く評価されました。</b></p>
4	長崎県 東彼杵町	一般社団法人 東彼杵ひとこともの公社	<p>東彼杵町（ひがしそのぎちょう）は、お茶とみかんとかじらの町、長崎県の玄関口として知られ、県内で2番目（7,698人）に人口が少ない町。東彼杵ひとこともの公社は、廃倉庫を改装した交流拠点を整備し、周辺エリアでの新規開業を支援しつつ50人以上の移住者を呼び込んでいる。2015年、取り壊寸前だった築70年以上の旧千綿第三農協米倉庫をリノベーションし、地域交流拠点となる「Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫」としてオープン。拠点の企画として5年で5店舗をこの千綿地区に派生させる企画「パッチワークプロジェクト（寄せ集め出店）」の仕組みを仕掛け、千綿食堂や海月食堂、ちわたや、LittleLeoなど5年で20店舗がこの千綿地区に出店・起業（20店舗の内、15店舗を創業サポート）、東彼杵町の旅行訪問の目的地化や九州電力と連携して東彼杵町の交流移住人口の拡大、関係人口創出を進め、地域活性化の起爆剤となっている。<b>目立った観光資源等がない地域においても、知恵とユーモアで動きを生み出せるという好事例。一つひとつの活動のネーミングに頓智が散りばめられていたり、何かやりたいという人の気持ちを引き出しながら応援する「パッチワーク」の考え方など、町民をはじめ関わった人がワクワクするような仕掛けが満載の取組や短期間で拠点の開発や起業の支援を実現するなど、軽快なフットワーク・スピード感も大きな魅力と高く評価されました。</b></p>
<b>オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞 3件</b>			
5	奈良県 明日香村	特定非営利活動法人 明日香の未来を創る会	<p>明日香村稲淵は、観光客で賑わう石舞台古墳から県道15号を2キロメートルほど南下した所にあり、集落には大和川水系の「飛鳥川」が流れ、その河岸段丘の斜面に棚田とこれを維持してきた農家、非農家あわせて60戸ほどが暮らしている。稲淵棚田の起源は15世紀に遡るとされ、数百年にわたって代々稲作が続けられている。四季の移ろいとともに独特の美しさを見せる棚田の農村風景は、見る人の郷愁を誘い「日本の原風景」とも呼ばれてきた。都市住民との協働で棚田を守る棚田オーナー制度や農作業体験プログラムを用意し提供する。棚田オーナー制度緑豊かな明日香の里山で、村の人々との交流を通じて、里山の自然、文化、生活、人々の魅力に触れ、棚田での農村体験を提供している。田植えや稲刈り、野菜の収穫、山菜狩りなどの農業体験、そば打ち、わらしじ作りや竹細工などの手作り体験、そして楽しい餅つき体験などの他に棚田の自然観察も用意している。<b>度重なるイノシシ被害など困難のなか、案山子コンテストや地域の子供たち対象の田植え・稲刈り体験など、取り組みを継続し農業遺産としても価値のある棚田の保全し後世に伝えていく活動を27年間継続している点が高く評価されました。</b></p>
<b>裏面につづく</b>			



6	和歌山県 有田川町	有田川町×龍谷大学	<p>有田川町はぶどう山椒発祥地であり、和歌山県は山椒の生産量日本一だが、生産者の高齢化が激しく、既存ルートに出荷しているだけでは若く、後継者不足も深刻で5年先に産地が消滅する可能性が高いと言われている。これらに危機感を抱き、有田川町と龍谷大学が中心となり、平成31年からぶどう山椒農家、地域住民、企業等と連携しながら、多面的に産地振興を実施。龍谷大学との包括連携協定締結では、「ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト」を発足。同大学経営学部藤岡ゼミと主として連携し、学生がフィールドワークを行い、ぶどう山椒の市場調査や産地の認知度向上、商品開発やプロモーションを行っており、ぶどう山椒オフィシャルサイトも開設。都市部の企業から連絡があり、商品開発・販売に至った例が多数。さらに若手農家に火が付き、自社商品の開発による6次産業化や輸出商社との商談等販路拡大が盛んになった。ミシュラン3つ星の料亭にも採用される等、ぶどう山椒を主として生計を立てるモデルとなる経営スタイルが確立しつつあり、県や町と連携して移住・就農インターンシップにも取り組み、県外からの移住就農者も誕生している。<b>生産者と大学生のつながりを商品化まで昇華させた点や、春夏秋冬にわたる活動（生計）への意欲的な試み、若手農家が複数のナリワイを持ちながら身をたてながら持続可能な農業に取り組むというスタイルを体現し、移住就農者につなげている点が高く評価されました。</b></p>	
<b>オーライ！ニッポン大賞 審査委員長賞</b>				
7	長崎県 南島原市	農事組合法人 ながさき南部生産組合	<p>「消費者から支持される生産方法」を守り、信頼を得て47年。諫早市の住宅街に平成17年開設した直売所では、スイートコーン収穫体験等を企画・実施し、若い客層をつかんでいる。平成30年からは長崎市内のレストランやこども食堂への食材提供を開始。Uターン就農希望者に対する取り組みにも力を入れており、研修施設や宿舍等環境を整備し、受け入れ農家の協力を得て、環境・自然に配慮した実践的な農業研修を通じた「プロ農家育成研修プログラム」という就業支援活動と研修終了後の独立・販売支援も実施。結果、研修生から直売所販売農家も生まれている。南島原市内も空き家が目立つ、ながさき南部生産組合員は「空き家バンク」に先駆けて組合員が空き家を購入し、自家の空き家を活用して移住者に低額家賃で貸し出すなどの取り組みを実施（4軒）、負の財産になりそうな空き家の減少や移住者の定住にも貢献している。平成20年に設立された南島原市ひまわり観光協会の農家民泊に農業体験受け入れ家庭として働きかけ、約170件の受け入れ家庭の登録につながった。<b>昭和50年、有機農法研究並びに有機農産物産直に取り組む二つの任意組織からスターとし、生協産直を全国的に拡げ、年間事業高は約2.2億円（生協等の産消提携の取引が7割）へと発展し、その取組みは、今日、重要な農政課題の柱となった「みどり戦略」の取組みをいよいよ先取りしてきた。農家の方々の自信を取り戻して自主自立の形を構築し、地域の雇用も創出するという体系的な仕組み作りは他地域への応用や波及が見込める。また、地元高校生との協業やインターンシップ、修学旅行の受け入れなど未来につながる若者へ取り組みも高く評価されました。</b></p>	
<b>オーライ！ニッポン ライフスタイル賞 5者</b>				
8	東京都 江戸川区	せざき まさひろ 瀬崎 真広 さん	<p>NPO法人ZESDA（本業を有する若手サラリーマンが個人資格で集まるプロボノ団体）の理事であり、「春蘭の里」の支援リーダーを務める。都内の金融機関に勤務。6年前に石川県奥能登の農家民宿群「春蘭の里」に旅行した際、人の温かさや、キョウヤブリ等の料理、白壁の伝統建築等、里山里海の文化に魅了され、人口減により消滅危機にある地域を後世に残すべき地域の文化資源と都内勤務の会社員が持つポテンシャルを結び付けた定期訪問しながら多様な人で賑わう地域づくりへ支援を開始した。ネットワークを活用し、集客・資金・運営支援等を行い、支援者も拡大した。その後、能登町役場等と連携し、都内サラリーマン向けのパラレルキャリア研修を春蘭の里で継続的に実施している。<b>本業を有する若手サラリーマンが、都内で蓄積したコネ・チエを地方に注ぐ。地域の活性化と、都内サラリーマンのパラレルキャリア形成を両立させた。副業を解禁する企業も増える中、本業以外にもやりがいを求める人たちにとっても参考になる取り組みと高く評価されました。</b></p>	
9	新潟県 上越市	うしだ みつり 牛田 光則 さん	<p>農業研修を終了後、2017年の春に「コメ農家＋農家民宿うしだ屋」として事業を開始。田んぼや機械を地域の方々から借り受けて、師に倣いアイガモ農法（一部は低農薬栽培）での米作りをスタート。同年秋には、自宅として利用していた元空き家の古民家をリノベーションし定員6名の農家民宿もオープン。田麦集落は首都圏の小・中学生を受け入れる「越後田舎体験」という都市農村交流が二十年以上つづいていたが、いわゆる一般的な観光地ではない。そのような中でも、宿開業以来、延べ泊数にして800泊を超える新たなお客様に集落や地域の紹介している。また、地元集落内の同年代農業後継者らと経営や営農技術のノウハウ共有・地域ブランド作りを目的とする会社の設立を呼びかけ、2022年8月「合同会社地商店」を共同で立ち上げた。<b>米農家への新規就農という高いハードルを乗り越え、農家民宿による複合経営を行い、半農半Xの実践で地に足のついた生活をしているが、それだけでなく若手農家を取りまとめ、合同会社を設立するなど稼げる農業を目指し、地域全体を盛り上げる取り組みを行っている点を高く評価されました。</b></p>	
10	島根県 雲南市	さんべ ひろみ 三瓶 裕美 さん	<p>地域おこし協力隊の任期後、雲南市の「空き家付き農地取得制度」を利用して、空き家と農地を一緒に購入。東京から移住して12年、「体と食と農のつながるスペース」【つちのと舎】を夫婦で経営し、自然農や民泊、カフェ、ボディケアを行う。その他、地域自主組織「日登の郷」で広報紙の編集担当、雲南市の小中学校の体育活動コーディネーターとしてダンスや表現運動の講師、雲南圏域（雲南市、奥出雲町、飯南町）では「FMいずも」のラジオパーソナリティー「ルーラル雲南」として番組制作（2015年10月～2022年12月）、島根県では一般社団法人しまね協働隊ネットワークの代表、全国規模では地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員も担当している。令和5年度からは、雲南市地域おこし協力隊マネージャーに着任。<b>多業の傍ら、地域おこし協力隊としての自らの経験を次の移住者や協力隊に伝えるための、サポートデスクでの支援や県の協力隊ネットワークづくりを行うなど、地域に溶け込み頼られながら新たな人材の取り込みと定住サポートを積極的に進めている点を高く評価されました。</b></p>	
11	広島県 広島市	くにた しょうへい 國田 将平 さん	<p>2018年4月に広島市南区の似島（にのしま）へ単身移住し7月から鍼灸院を開業。その後、民泊「くへいハウス」や「にのしま自然体験活動クラブ」を来島者向けに運営、実施を行なっている。基本、平日は似島、週末は広島市内近郊に住んでいる家族のもとへ往来。 広島市内と近い距離ある似島は、都市部とは対照的に山と海の自然が豊富。その立地を活かして、登山やサイクリング、牡蠣打ち工場の見学、昆虫食（セミの採取と試食）などを開催。また、自然体験活動上級者指導者の資格を取得し、自然体験学習や放課後児童クラブの自然体験プログラムとして似島に来島しとっている。<b>鍼灸師の専門技術を活かして、離島において鍼灸ができる唯一の存在として活躍の場を見つけており、とかく専門職が不足する条件不利地域における専門職の幸福なあり方のロールモデルと言える点が高く評価されました。</b></p>	
12	愛媛県 西条市	やまなか ゆか 山中 裕加 さん	<p>松山市出身。都内の大学で建築学を専攻。大学院で都市史・都市論、国際都市開発/再生を学んだ後、（株）スピークにて建築デザインや不動産企画・施設運営管理等の業務に従事。在籍中に担当した地方自治体への移住促進事業の経験から地方での「まちづくり」に興味を持ち、2018年に個人事業主開業後、都内でデベロッパー向けの不動産活用の企画業務を軸に事業を行う一方、全国を無拠点居住で放浪。2019年5月より愛媛県西条市のローカルベンチャー誘致・育成事業への参加をきっかけに同市へ拠点を移し、商品開発や場所づくりを通してまちと人をつなぐための事業を展開。「メンマチョProject」は、放置竹林という地域課題を身近に感じてもらうため、商品開発販売を行い、地域内での収穫イベント（ワークショップ）開催やイベント出店を通して、課題に目を向けるきっかけづくりと竹林整備の一環として「メンマの原材料の収穫」を継続的に行う人材の育成を目的としている。<b>放置竹林は、全国的な課題であり、メンマへの活用は面白い。新たなニッチを探り当てれば、地域経済にも反映する若い人々を巻き込みながら、収穫体験を行うことで、竹林整備につながる活動を企画・実行した推進力は素晴らしいと高く評価されました。</b></p>	